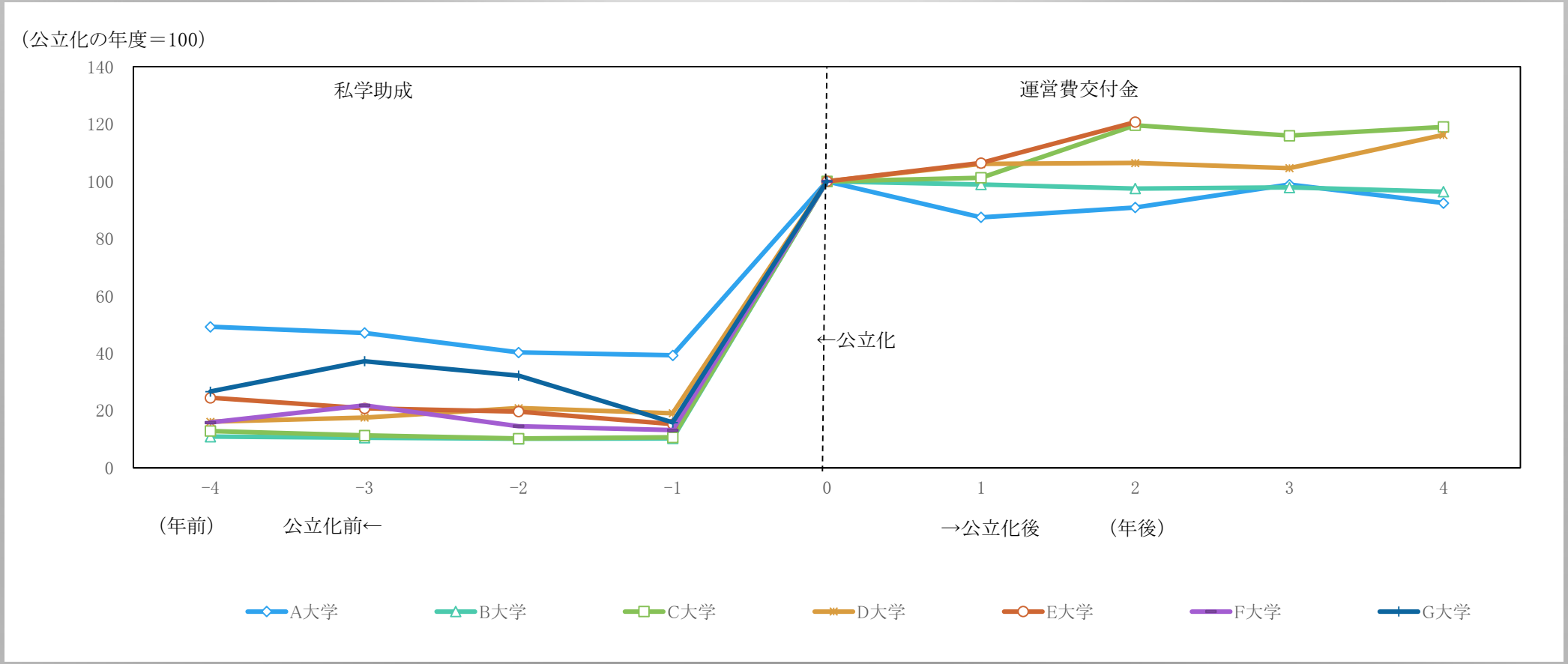
資料2-1 伊藤委員資料

地域における新しい高等教育のあり方について

伊藤元重

安易な公立大学の設立は財政負担を高める

私立大学の公立化前後の私学助成・運営費交付金



私学助成の推移～定員割れ大学への配分が増加

（億円）

	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
交付対象私立大学等　全体	3230.0	3195.7	3206.3	3165.9	3211.6
定員割れ私立大学等　計	682.3	702.7	677.3	744.1	830.9
定員充足率75%以上100%未満	520.6	552.9	515.6	570.6	637.2
定員充足率50%以上75%未満	160.5	148.8	160.8	172.9	192.3
定員充足率50%未満	1.2	1.0	0.9	0.6	1.4
定員充足私立大学等　計	2547.7	2493.0	2529.0	2421.8	2380.7

安易な大学創設の問題点

- 旧来型の大学の機能が静岡にさらに必要なのか
- 地元の大学の救済になるのでは財政負担増
- 若者人口減少の中での大学教育への需要
- すでに存在する既存の地域の大学との住み分けは？
- 優秀な教育人材を集めることの難しさ

高等教育に求められる新しい姿

- 高等教育への国民的支出の停滞
  - 教育費の低迷はよく指摘されることだが、高等教育への支出減が特に顕著
  - 将来への投資（人的投資）を怠っては未来が暗い
- 大学というのは若い人のための専門機関ではない
  - 大学生の大半が20歳前半までというのは日本の特殊性
  - 多様な世代が混在する教室やキャンパスの意義
- 情報技術をどう活用するのか
  - MOOKなどの活用の広がりの中でキャンパスの機能とは？
  - 閉鎖的なキャンパスではなく、開放的な教育の場の模索
- 大がかりのキャンパスを持つ大学ではなく、より柔軟なネットワークとプログラムの集積なのかもしれない

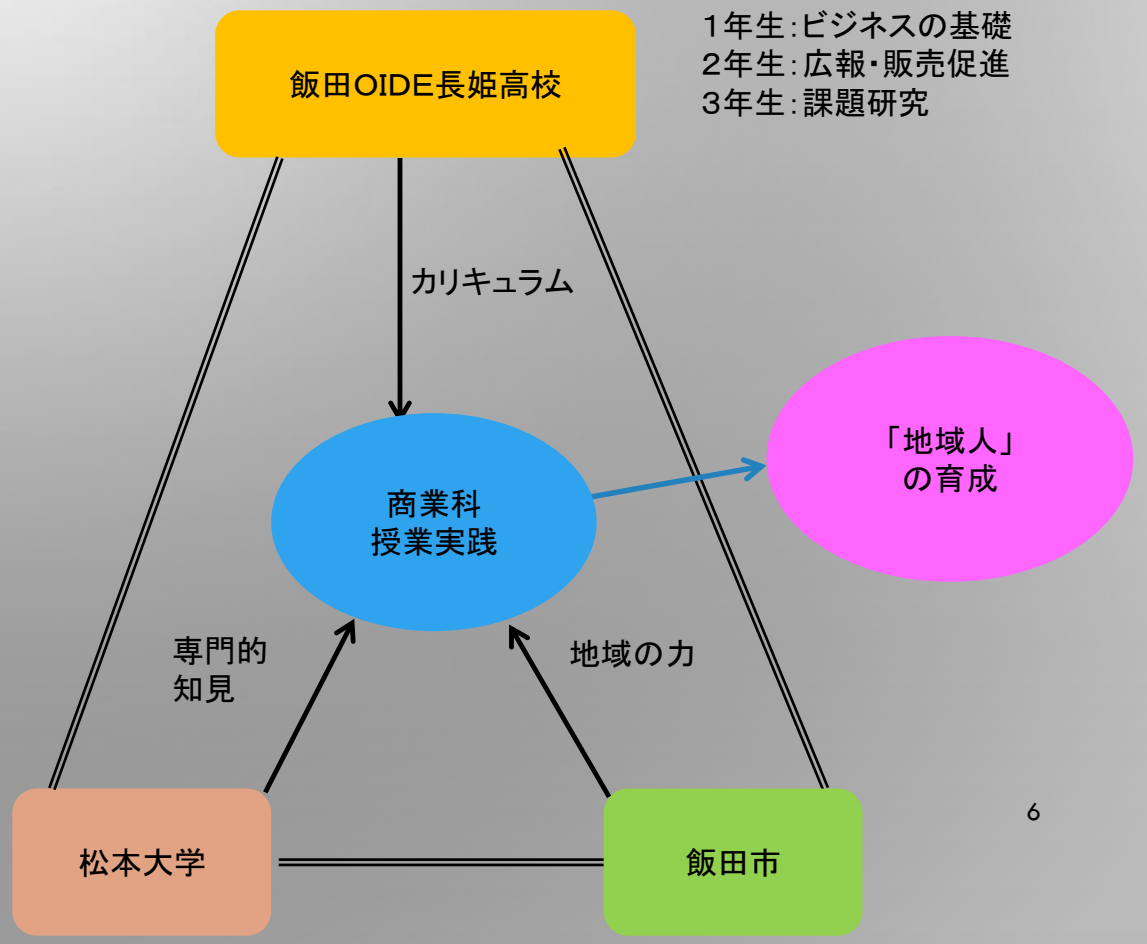
人生100年時代

- 子供は学校だけの世界、大人は仕事だけの世界、だから高齢者はやることがない？
  - 人生の各時点での分業の見直し
  - 子供にはもっと社会との触れ合いを、そして大人には学びの機会を
  - 多世代が混在する学びの場の意義
- 大学までの時代に学んだ知識（ストック）で一生、というのは無理
  - 常に新たな学びの機会を持てる仕組みづくり
  - 学びとは若い人にとっては投資という面が強いかもしれないが、高齢者はもちろん若者にとっても「消費」という面があってもよい
- 仕事と学びの連携
  - 学びと仕事は繋げるような仕組みも必要
  - きちっと学べば仕事につながるという期待を高める
  - 兼業・副業の時代の流れを教育のあり方にも生かす

高等教育と地域の活性化

・地域の様々な組織との連携の模索

・そもそも、地域でどのような人材育成が必要なのか議論が必要

・高等教育という意味では、大学生や社会人が想定されがちだが、高校生なども巻き込むことが必要ではないか？地域独自の英才教育などもあってもよい66

飯田市における高校、大学、市の連携モデル